

論文の内容の要旨

氏名：土 方 圭

博士の専攻分野の名称：博士（教育学）

論文題名：野外教育の指導に関する定性的研究 - 「野外」という臨床性に着目して -

「野外教育」は欧米中心に発展したとされる。プラグマティズム、進歩主義教育思想の隆盛を背景とした1930年代からの野外教育組織の設立は、指導に関する研究を発展させた。欧米に呼応し、我が国でも指導者に関する研究がなされ、少数ではあるが一定の成果をあげた。

一方で、野外教育の現場からは、研究の実践貢献に懐疑的な向きも存在する。キャンプ等に代表される野外教育の研究は、近年、主に実証・客観主義的に進められ、統計学的分析等なされることで「科学」の装いを纏った。しかし、野外教育は実体験による一回起性・多様性に満ちる「人間と自然が構築する場」の出来事といえる。実証・客観主義科学の下では、実践で培った知見が「偏差」として捨象される可能性が否めない。指導の実情を捉え、実践への反映を望むならば、野外教育の「臨床性」を尊重した研究方法の吟味を行う必要がある。

近年、現象を情況関連的に捉え解釈を試みる定性的研究が広がりを見せている。社会構成主義は「現実を社会的に構築された絶え間なく変化する動的な過程」とし、刷新可能な解釈学的アプローチを特徴とする。多義性や情況依存性を前提とする野外教育の臨床的特質は、これらを背景とする方法論に親和性が高いと思われる。

そこでⅠ章では、野外教育指導者へのスキルトレーニングが「グループの指導に関するスキル」獲得に及ぼす影響について、社会構成主義を背景とするナラティブ・アプローチとビデオ映像フィードバックの併用トレーニングを事例的に検討した。

このトレーニングでは「課題設定」「グループと個人の関係」への認識に変化が生じた。「課題設定」では参加者中心で場に即した柔軟な設定への認識が見られた。「グループと個人の関係」は、個々の出来事から全体を捉える個人とグループの相互作用が強調された。

一方、トレーニング方法については、ビデオ映像視聴と面談により客観的・多面的な情報が提供され、情報の拡大を「語り」が質への転化として補足し、「気づき」が促進されると解釈された。

本章では、野外教育指導における定性的研究の有効性を一定程度確認した。

ここまでの方法論に関する議論を継承し、野外教育研究における実践の場の多義的・情況依存的な臨床的特質を是とするならば、研究対象の変数についても吟味を要する。例えば、ある状況では「声がけ」を行うが、類似した別の場面では行わない状況がありうる。この場合、先の「スキル」概念では抽象度が低く、様々な情況依存的性質に対応しえない。

そこでⅡ章及びⅢ章では、研究対象となる指導関連変数を「スキル」から「態度」に変更した。

まずⅡ章では、特に態度やイメージ構造の分析に長ずる PAC (Personal Attitude Construct) 分析を実施し、組織キャンプ指導の全体的・統合的な態度構造を個人別に分析した。

被験者は豊富なキャンプ指導経験をもつ男性1名であった。キャンプにおける「自然とのふれあい体験」、「挑戦・達成体験」、「他者協力体験」、「自己開示体験」、「自己注目体験」の促進という観点から指導を捉え、その態度構造について検討した。この事例における被験者の反応を総合的に解釈すると、「キャンプという環境の中で『場』の力を活用し、参加者の主体的な関わりを引き出し、効果的なキャンプ体験を提供する」という指導態度が解釈され、「場の力」の活用や参加者の「主体的な関わり」を引き出すという態度が構造を基礎づけていると解釈された。

続くⅢ章では、前章の「場の力」を引き出す指導態度に注目し、複数の指導者に PAC 分析を実施し、特に「場の力」と関係が深いと思われる「自然とのふれあい体験」の促進に焦点化して解釈を試みた。

被験者は豊富な指導経験をもつ大学教員2名で、被験者Aでは自分が行う「自然とのふれあい体験」指導を肯定し、自信をもち、同時に多様な他者を許容していく。これは日常的に感性を磨くことにより実現

されていく。以上のような信念が「参加者に対する五感を使った直接体験指導」を支える構造となった。

一方、被験者Bからは時間的（プログラム調整等）・空間的（視点の巨視化等）に「穏やか」で「リラックス」した指向の態度構造が解釈された。

総合的に吟味した結果、「直接体験の提供」と「多様性への理解（主体性の尊重を含む）」が自然とのふれあい体験の指導態度構造で重要な要因と解釈された。

被験者Aの「自信をもち、そして敏感に感じることを受け「どうすれば自信を持つ・敏感に感じる」ことが可能か」と問うと「仏教の『無』とか『空』に関係する。生き方が関わってくる」との回答を得た。宗教性や信念などに関係した「生」そして「世界」をどのように切り取るかといった「認識（価値）」の問題といえる。被験者Aは「認識」が指導を規定する重要な要因と主張した。

以上よりIV章では、指導を規定する「認識：自然に対するイメージ（自然観）」の検討に着手した。PAC分析により解釈を試みた結果、被験者Aの自然に対するイメージは、慈母と厳父に象徴される優しさと厳しさを包摂するアンビバレントなイメージが、また被験者Bでは「流転」に代表される時間的連続性と「開放」に代表される空間的連続性が解釈され、同時に均衡のとれた関わり合いのイメージも解釈された。機械論的・客観主義的な自然と人間との対立や統制といった印象や自然への「甘えと優越」という現代的自然観でなく、日本古来の「甘えと畏れ」というイメージとして解釈された。

ベテラン指導者の自然に対するイメージは日本伝統の自然観に近接し、これは「畏敬の念」等として指導を規定する重要な要因といえよう。

ところで、このようなイメージをもつ指導者は野外教育にどのような意義を見出すのであろうか。なぜなら、「価値」に関する問いは、先の「信念」等と関連し指導を大きく規定すると考えられるからである。また、自然に対するイメージが明らかになった今、それを念頭に置いた「自然体験の意義に関する議論」が可能であり、論点の分散を抑制できる。

そこでV章では、経験豊富な指導者は人間教育としての自然体験活動にどのような意義（価値）を見出すのかを問題としPAC分析を指導者2名に実施した。この点への解釈は「自然の意味」にも通じ、野外教育の指導を方向づける重要な試みといえる。

その結果、自然体験活動について「具体的で多様な自然環境での実体験による身体性の涵養」や「関わり合い」といった意義が見出された。多彩な自然環境に身体を曝し、関わり合い、関係を構築する。これが活動の意義の枠組みと考えられる。

指導に資する「場の力」とは何かという問題を動機としたIII、IV、V章の知見を概観すると、「関わり合い」・「均衡のとれた関係性」や「直接体験」・「身体性」等に集約される。これらは「自然」の関係概念（コト）的側面への内容で極めて重要な示唆を与えている。

「自然」概念は多義的であり、近年では自然科学的自然が醸成する客観的イメージが強い。この実体概念（モノ）的側面の与える影響は多大で、先の各章は自然の関係概念的側面への着目を示唆したにも関わらず、実体概念的側面の印象が指導者を「思考停止」や「ステレオタイプ」へと絡めとる可能性がある。これに処するためには、自明としていた「野外教育の場＝自然」との前提に疑義を呈し、野外教育を再構築すべく、「場（場所）」とは？「野外」とは？という問いに向き合う必要がある。

野外教育で第一義といえる「場所」を考察した伊東俊太郎は、認識とは主観と客観との関係で、この関係を作らせるのが「場所」であるとし、主観と客観を結び付ける全体状況の中にこそ認識の現実があるとした。ここでは実体論（モノ）から関係論（コト）へといったコペルニクスの転回が齎される。そして、「場所」依存的な認識構造及び人間存在について、和辻哲郎が提唱する「風土」における人間の在り様と同義と主張した。

和辻は、「風土」を近代二元論を批判する現象学、特にあらゆる現象を関わり合いの経験（志向性）と捉える立場から構想した。風土を自然現象にも文化・精神現象にも還元せず一体のものとし、「人間存在の型」であり「自己了解の仕方」と捉えた。風土を自然条件と文化・精神的営みが一体となった関わり合いの空間として、また、現在は過去に先祖達によりなされた自己了解の堆積上に成り立つもので、我々を「風土的過去」を背負う歴史的存在とした。

一方、「風土」は古くから「地域」や「自然」と関連して用いられた。谷津は風土を「自然のままの自然」

「人為により改変された自然」としての自然環境（第一種）とし、第二種には自然環境とそれに関わるどころの社会構造・生産と消費・政治を加えた。最後に第三種では一種と二種にさらに精神文化と伝統などを加えたものと整理した。

野外教育は「場所」を第一義とする。人間の存在及び認識は「場所依存的」性質を孕み、この場所依存性は和辻の「風土論」でも人間学的に類似して展開される。これより「野外」教育は「風土」及び「風土性」に焦点化された教育であると解釈できよう。谷津及び和辻の「風土」から「野外」の内実を吟味すると、野外教育は第一種の自然環境との「直接的」「身体的」な「関わり合い」で展開されるのみならず、二種・三種の歴史的刻印を受けた風土・風土性（社会構造・生産と消費・政治、精神文化・伝統など）とも密な教育といえる。自然をも包摂する関係概念としての風土が「野外」に新たな地平を拓いたといえよう。

以上より、野外教育における野外に「野外すなわち自然環境を中心として醸成される風土及び風土性との関わり合い」という解釈の方向性が見出された。（VI章）

最後に、野外教育に関して、その指導における臨床的特質は人間の「風土」及び「風土性」に由来するものとなろう。野外教育の実践に際しては、この点について十分に考慮される必要がある。

以上